

錢湯

泉鏡花作

全一章

それ熱ければ梅、ぬるければ竹、客を松の湯の揚場に、奥方はお定りの廂髪。大島擬ひのお羽織で、旦那が藻脱の籠の傍に、小兒の衣服の紅い裏を、膝を翻して控へて居る。髯の旦那は、眉の薄い、頬の脹れた、唇の厚い、目色の嚴い猛者構。出尻で、ぶく／＼肥った四十ばかり。手足をぴち／＼と膠ねる、二歳ぐらゐの男の兒を、筋鐵の入った左の腕に、脇へ挟んで、やんはり抱いた處は、挺身倒に淵を探つて鱒を生捉つた體と見える。

「おう、おう。」

などと、猫撫聲で、仰向けにした小兒の括頭へ、動りをくれて揺上げたがら、湯船の前へ、ト腰を抜いた體に、べつたりと踞んだものたり。

「熱い、熱い、熱いな。」

と手拭を濡しては、髯に凜で、ぴた／＼と小兒の

胸を浸してござる。

「早う入れとくれやせな。風邪エびきすえ。」

と揚場から奥方が聲を懸ける。一寸断つて置くが、

此の方は裸體でない。衣紋正しくと言つた風で、

朝からの厚化粧、威儀備はつたものである。たとび

紋着で袴を穿いても、これが反對で、女揚の揚場

に、待つ方が旦と成ると、時節柄、早速其の筋から

御沙汰があるが、男湯へ女の出入は、三馬以來大目

に見てある。

「番頭にうめさせとるが、なか／＼ぬるならん。」

と父様も寒いからい揚を浸した手拭で、密を擦つ

て、其の手を肩へまはして、ぐしゃ／＼と背中を

敲きながらい胴震に及んで、件の出尻の据らぬ處は、

落武者が、野武士に剥がれた上、事の難儀は、失玉

の音に顛倒して、御臺御流産の體とも見える。

「ちやつとおうめやせた、貴下、水船から汲むが

可うすえ。」

と奥方衣紋を合せて、序に下襦袢の白い襟と云ふ

處を厭味に出して、咽喉元で一つ扱いたものなり。

「然ぢや、然ぢや、はあ然ぢや。はあ然ぢや。」

と、馬鹿騷子に浮れたやうに、よいとこまかして、

によいと突立ち、腕に抱いた小兒の胸へ、最一つ頤を壓へに定くと、い那ひ跳鰯として、取つた叭と云ふ仕切腰。

さて通口に組違へて、角のない千兩箱を積重ねた留桶を、片手掴みで、水船から掬出しては、つかり加減た處を狙つて十杯ばかり立續けにざぶ／＼と打ちまける。

猶以て念の爲に、別に、留桶に七八杯、凡そ湯船の高さまで、凍るやうな水道の水を満々と湛へたのを、舷へ積重ねた。これは奥方が注意以外の智慧で、ざぶ／＼と先づ掻廻して、

「可からう、可からう、そりやざぶりとぢや。」と桶を倒にして、小兒の肩から我が背中へ引かぶせ、

「瀧の水、瀧の水。」と言ふ。

「貴下、湯瀧や。」

と奥方も、然も快ささうに浮かれて言ふ。

「うゝ、湯瀧、湯瀧、それ鯉の瀧昇りぢや、坊やは豪いぞ。そりやも一つ。」

とざぶりと浴けるのが、突立つたまゝで四邊を構はぬ。こゝは英雄の心事料るべからずであるが、

打ぶまちけられる湯ゆの方ほうでは、何なんの斟しん酌しやくもあるののでないから、倒さかしま湯ゆ瀧たき三さん千せん丈ちやうで、流なが場しば一いち面めんの土ど砂しゃ降ぶり、板いたから、ばちや／＼と恐はねが飛とぶ。

「あぶ、あぶ、あぶ、あつぶう。」と、圓まるい面づらを、べろりといたいけた手てで撫なでて、頭あたまから浴あびた其その雫しづくを切きつたのはい五い歳じゆうばかりの腕わん白ぱくで、きよりりとした目めでびよいと見みて、又また父おや親ちを見み向むいた。

此この小こ僧ぞうを、根ね附つけと云いふ身みで、腰こしの處ところへ引ひつけて、とめをけまへに、流なが臺だいかすへ蚊な脛がしをはだけて、瘦やせた仁に王わうと云いふ形かたち。天てん地ち阿あ吽うんに手て拭ぬぐひを斜はすつかびに突つ張はつて、背せ中なを洗あらつて居あたのは、刺ほり繡もののしたびた四十五じゆうご六むの職しよく人にんであつた。

失や張つぱり御ご多た分ぶんには漏もれぬ方ほうで、頭あたまから今いまの雫しづくを浴あびた。これが、江え戸ど兒こ夥な間まだと、氣きをつけるい、ぢやんがら仙人にん、何ど處この雨あま乞こひから來きやあがつた、で、無な事じに濟すむべきものではないが、三さん代だい相きゆう傳でんの江え戸ど兒こは、田あ舎なものだ、と斷ことわる上は、對あひ手てが戀こひの仇こひかたでも許ゆるして通とおす習なまひである。

「此方こつちへ來きねえ。」

とばかりで、小兒を、其の、せめても雲に遠い左の方へ、腕を掴んで居直らせた。

旦は洒々々々としたもので、やつとこた、と湯船を跨いで、ぐづ／＼／＼と溶けさうに腰の方から崩れ込みつゝ眞直に小兒を抱直して、片手を湯船の縁越しに、ソレ豫て恚くあらんと、其處へ遁路を拵へ奮く、間道の穴兵糧、件の貯蓄の留桶の水を、片手にぎぶ／＼、と遣つては、ぶくぶくいざぶ／＼と遣つては、ぶく／＼、小兒の爪尖、膝から、股、折から胸、肩から咽喉、と小さく刻んで、一つを一度に、十八杯ばかりを傾け盡して、漸と沈む。此の間約十分間。恚うまで大切にすると云ふのが、恩人の遺兒でも何でもない、我が兒なのである。

場場の奥方は、最う小兒の方は安心なり。待くたびれた、と言ふ風で、例の襟を引張りながら、白いのを又出して、と姿見を見た目を外らして、傍に貼つた、本郷座の辻番附。ほとゝぎすの繪此羅を見ながら、熟と見惚て何某處の御鼻屑を、うっかり指の突で一ちよつとく。

「さあ、飛込め、奴。」

で、髯旦の、どぶりと徳利を抜いて出るのを待兼

ねた、右の職人、大胯にひよい、と入ると、

「わつ、」と叫んで跳ねて出た。

「堪らねえ、こりや大變、日南水だ。行水盥へ鱧が湧かうと言ふんだ、後生してくんねえ、番頭さん。」

と、わな／＼震へる。

前刻から、通口へ顔を出して、髯旦のうめ方が、まツ其の通り、小兒の一寸に水一升の割を覗いて、一驚を吃し三助、

「然も然うず、然もどざりませうぞや。」

と情たい聲を出して、故と遠くから恐々らしく、手を突込んで、颯と引き、

「ほう、うめたりた、總入齒。親方、直ぐに湯を入れます。」

と突然どんつくの諸膚を脱いだ勢で、引込んだと息ふと、髯がうめ方の面當なり、腕の扱きに機關を掛けてい爰を先途と熱湯を注ぎ込む、揉込む、三助が意氣湯煙を立てて、殺氣濛々として天を蔽へば、湯船は瞬く間に、湯玉を飛ばして、揚場まで響渡る。

「難有え。」

職人は、呀、失聲を懸けて飛込んだが、さて、童を何うする。

「奴、入れ、さあ、何が熱い、何が熱いんだい。

べらぼうめ、弱い音を吐くねえ、此の小僧、何うだ。」

「うむ、入るよ。」

と言つたが、うつかり手も入れられない。で、ちよこんと湯船の縁へ上つて、蝸牛のやうに這廻る。

が、飛鳥川の淵は瀬と成つても、此の湯はなか／＼ぬるくは成らぬ。

唯見ると、親父は揚玉を拂つて、朱塗に成つて飛出したいが握太た蒼筋を出して、脛を突張つて、髯旦の傍に突立つた。

「誰だと思ふい唄が長の煩でたけりや、小兒なんぞ連れちや來ねえ。恚う、奴、息切つて飛込め。生命がけで突入れ！ 汝にや熱いたつて、父にはぬるいや。うぬ勝手にた、人様に迷惑を懸けるもんぢやねえ。うめるな、必らずうめるな。やい、こんな

湯へ入れねえぢや、父の子とは言はせねえ。髯の兒  
にたゞつくれるぞ、さあ、入れ。骨は拾はい、奴。  
と喚くと、縁を這廻り／＼、時々倒に、一寸指の  
先を入れては、ぶる／＼と手を震はして居た奴が、  
パチャリと入つてい「うむい」と云ふ。中から縁へ  
しがみついた、面を眞赤に、小鼻をしかめて、目を  
白く天井を睨む。のをい熟と視めてい  
「豪え、豪え。其でもぬるけりや羽目をたゞけ、  
と言ひながら、濡手拭を、ひとりでに、思はず向顔  
巻で、切ない顔して涙をほる／＼と溢した。

「それ、ぢやぶ／＼、それ、ぢやぶ／＼、  
と髯旦は傍で、タオルから涙をだぶり。

堪へ兼ねて、奴が眞赤に跳ねて出る。

「やあ、金時、足柄山、えらいぞ金太郎。」と三

助が、飛んで出て、

「それ、熊だ、鹿だ、乗んたせえ。」

と、奴の前の流を這つた。

髯はタオルから湯をだぶり。

「それ、ぢやぶ／＼、それ、ぢやぶ／＼。」あ  
らう事か、奥方は渦きかゝる湯氣の中で、芝居の繪  
此羅に頬をつけた。

【完】